



モビリティのカラーデザインコンテスト 一般社団法人 日本流行色協会 (JAFCA) 主催

# オートカラーアワード 歴代グランプリ

1998年度よりはじまった「オートカラーアワード」。歴代のグランプリをご紹介します。\*色名の (ext) はエクステリアカラー、(int) はインテリアカラー。第8回より色名にインテリアカラーも併記。(複数台の場合掲載を省略)

第1回 (1998年度) スパークリングゴールドメタリック (ext) / 「ハリアー」 (トヨタ自動車)



上質でラグジュアリーな「ニューコンセプトSUV (スポーツ・ユーティリティ・ビークル)」をイメージしたデザインにベストマッチしたボディーカラーを開発した。

第2回 (1999年度) ベールローズメタリックオパール (ext) / 「ヴィッツ」 (トヨタ自動車)



自動車という機械工業製品において、これまでにないソフトでフェミニンなテイストを開花させた。

第3回 (2000年度) クリスタルブルーメタリック (ext) / 「マツダロードスター」 (マツダ)



斬新な色を投入するのが難しいといわれていた日本のスポーツカー市場に、若々しく活動的なブルーを投入し高い支持を得た。

第4回 (2001年度) ファンタシアグリーン (ext) / 「ルポ」 (フォルクスワーゲングループ・ジャパン)



インパクトのあるソリッドのグリーンは、新技術がカラーデザインをリードする時代から、メッセージ性のあるカラーの時代へという変革を象徴した。

第5回 (2002年度) パプリカオレンジ×シナモン (ext) とコミュニケーションカラー / 「マーチ」 (日産自動車)



パプリカオレンジを含む5色の展開によって、ユーザーに色を選ぶ楽しさを提供し、色によって顧客満足度を高めた。

第6回 (2003年度) ハーベストムーンベージュ&ブラックルーフ (ext) / 「Newビートル」 (フォルクスワーゲングループ・ジャパン)



なごみ感、洗練さのあるベージュ。Newビートルの親しみやすいキャラクターにベストマッチした優雅なライフスタイルを連想させる世界観を表現した。

第7回 (2004年度) プレミアムシルバーパール (ext) / 「クラウンマジェスタ」 (トヨタ自動車)



見慣れた色といえるシルバーを、奥行き感とシルキーな光沢感でさらに洗練させた。高級であることに迷いなく向き合った、ピュアなカラーデザイン。

第8回 (2005年度) チャイナブルー (ext) アイスブルー (int) / 「マーチ」 (日産自動車)



旬を感じさせるターコイズブルー。内外装ともにブルーという打ち出しは、メッセージが明確だった。

第9回 (2006年度) ミスティグリーン (ext) ワイマラナー (int) / 「ティアナ」 (日産自動車)



落ち着きのあるグリーンのエクステリアとベージュ (ワイマラナー) のインテリアは、安心感、信頼感のある色。

第10回 (2007年度) サクラ (ext) カカオ (int) / 「マーチ」 (日産自動車)



甘ったるいムードになりがちなピンクをナチュラルに表現。ロングライフデザインで、カラーにより時代性を打ち出していくマーチの戦略も評価された。

第11回 (2008年度) スターゲートメタリック (ext) ウォームグレー (int) / 「FCXクラリティ」 (HONDA)



「エコカー」である燃料電池車の色として、宝石をイメージした透明感ある美しい赤を設定。新しい「エコ」カラーの方向性を示唆するものである。

第12回 (2009年度) プレミアムディープブルーパール (ext) ボルドー (int) / 「フェアレディZロードスター」 (日産自動車)



初代フェアレディZの色を今にモダナイズしたブルーは、長く愛されている色。長く続くような色気をもっている。

第13回 (2010年度) ホライゾンターコイズパール (ext) ブラック×シルバー (int) / 「CR-Z」 (HONDA)



落ち着きのあるプレミアム感がありながら同時にスポーティさもあわせもつ、時代にあったブルーである。

第14回 (2011年度) セラミックブルー (M) (#FAH) (ext) ブラウン (P) (int) / 「スカイラインクロスオーバー」 (日産自動車)



「青磁」をテーマにしたぬくもりのあるブルーが新鮮。スポーティイメージのエクステリアデザインがカラーによってまったく違って見えた点も評価される。

第15回 (2012年度) デザートカーキ (ext) ブラック (int) / 「XV」 (富士重工業)



彩度を抑えた渋いソリッドのカーキに、部分的に黒を効かせた美しいコーディネートが高く評価された。

第16回 (2013年度) ソニックチタニウム (ext) トパーズブラウン (int) / 「LEXUS IS 300h」 (トヨタ自動車)



ハイライトからシェードまで明暗のレンジが広く、陰影感が強いソニックチタニウムは、どんな光の状況でも美しく見え、ISの造形にもあっている。

第17回 (2014年度) パッションオレンジ×ホワイトルーフ (ext) など3つのカラー / 「ハスラー」 (スズキ)



“楽しい”をストレートに表現した色。カラーデザイナーが製作に関わる人たちを巻き込んで新しいカラーに果敢に挑戦し、実現したことも高評価を得た。

第18回 (2015年度) 心がときめくぬくもりカラーコーディネート (3つのカラー) / 「アルトラパン」 (スズキ)



生活者のライフスタイルが見えるカラーデザイン。これまでに採用されにくかった色域に挑戦し、カラーデザイナーの思いが細部にまでいかされている。

第19回 (2016年度) マシーングレープレミアムメタリック (ext) オーバーン (int) / 「マツダ ロードスターRF」 (マツダ)



マシーンの鉄をイメージさせるグレーを、グラマラスなカラーとして作り上げた。CMFと形状が一体となった非常に調和した美しさを持っている。

第20回 (2017年度) ブレイッシュグレーソリッド / 「MT-10/MT09/MT07」 (ヤマハ発動機)



バイクではホイール部分に明るい色を使うことがタブーとされていた中で、鮮やかなイエローを採用、タンクのグレーとあわせ新しいカラーに挑戦していた。

第21回 (2018年度) ガーデングリーン・メタリック (ext) ブラック (int) / 「N-VAN (エヌバン)」 (HONDA)



性別や年齢に関係なくマッチする、温かみを感じさせるグリーン。シェアの時代に相応しい、新しい「ニュートラルカラー」といえる。

第22回 (2019年度) ポリメタルグレーメタリック (ext) / 「MAZDA3 Fastback」 & 「MAZDACK-30」 (マツダ)



樹脂のようなぬるっとした質感表現と、青みの入ったような微妙なニュアンスのあるグレーが高く評価された。

